# あの日のキーマカレー

一宮東部小・６　比嘉　和奏

土曜日はいつもおばあちゃんの家で昼ごはんを食べています。今日もいつも通りおばあちゃんの家でごはんを食べました。そこでキーマカレーが出てきました。カレーは大好きなので、うれしいなあと思い一口食べたら「ん。」と頭がフリーズしました。なぜかというと、キーマカレーがショートケーキぐらいあまかったからです。おばあちゃんの料理はいつも少しあまいなと思うけれど今日のはいちだんとあまいぞ。と思っていると、おばあちゃんに、

「キーマカレーおいしい。」

と聞かれ、わたしは、一生けん命作ってくれたので、おいしくない。と言うと傷つくかなと思い、

「おいしい。」

と言いました。おばあちゃんはそう言うとうれしいのか、じいちゃんにも聞きました。けれどじいちゃんは、

「ものすごくあまい。砂糖なめているみたい。どんだけ入れたの。」

と自分が思ったことをどんっと言い、その答えに対しておばあちゃんが、

「ええ、そんなにあまいかな。砂糖は入れてないけどハチミツを大さじ三ばいくらい入れたよ。あっ、あとレーズン。」

と言いました。わたしは、だからこんなにあまかったのか、と思いもう一口食べようとしましたが、食べられませんでした。その時、姉が帰ってきて、わたしが、

「今日はキーマカレーだよー。」

と言ったら姉は、

「えっ、やったー。でもキノコ入っている。」

と言って、一口食べたら姉が急に、

「うっ」

と言ってうめき、あまりにもびっくりしたのか表情が暗くなり、

「ティッシュはどこ、ティッシュ。」

と言ってティッシュを探し始めました。数分後、姉がもどってきて、キーマカレーにまたチャレンジしました。そのときの姉は、きっとレーズンが原因だと思ったのか、レーズンとキノコを取り出していきました。姉は、

「なぜだ、なぜレーズンがなくならない」

とひとり言をぶつぶつと何回も言い、まるでとりつかれてしまったかのようでした。少ししたら姉が、

「やっととれた。これならもうあまくないだろう。」

と言っていました。姉はまだ知りません。おばあちゃんがハチミツを大さじ三ばいも入れていたことを。わたしはレーズンのせいじゃないよ。と言おうと思ったけど、この後の反応がおもしろそうだったので、言うのをやめました。そして姉が一口食べ、まだまずかったのか洗面所へ走って行きました。姉が帰ってきて、

「やっぱりだめだ。」

と言い、どう食べようがまよっていたときに母が帰ってきました。母は、全然ご飯を食べていないわたしたちを見て、

「どうしたの。なんで食べていないの。」

と聞き、わたしと姉は、
「食べたらわかるよ。覚ごしてね。がんばって食べてね。」
と言い、母はふしぎに思ったのかゆっくり口に運んでいきました。母は文句一つ言わずもくもくと食べ、すべて食べてしまいました。これを全部食べるなんてあま党の人でも無理だと思うぐらいあまいのに、それをすべて食べてしまうなんてすごかったです。みんな食べ終わり、もう食べたくなかったので、帰ろうと思いました。しかし、おばあちゃんが、
「持っていかない。たくさんあまっちゃうんだけど。」
と言っていて、必死にみんなで、
「絶対いらない。もう食べられない。」
と言い、おばあちゃんからにげるように家に帰りました。
今でもあの味は覚えているし、キーマカレーと聞くとあの味を思い出します。今度は一緒に作ろうね、おばあちゃん。　６・９